

明治期における伝承童謡蒐集について

真 鍋 昌 弘

(一)

江戸時代において、伝承童謡(わらべうた)を蒐集記録した文献として、すでに次のようなものが知られている。

行智『童謡集』 文政3年頃

栗田葛園『弄鳩秘抄』 文政7年

小寺玉晁『尾張童遊集』 天保2年

朝岡宇朝『子もり歌手まり歌』

『わらべ唄』(南葵文庫旧蔵)

高橋仙果『熱田手毬歌』

これらが第一等の文献であるが、さらに少数を記したものの、あるいは一部分に伝承童謡をも加えて得ているものとして、『越志風俗部』歌曲、『鄙廼一曲』、源成勝『てまりうた』、『嬉遊笑覧』巻六下、『守貞漫稿』第二十五、『皇都午睡』初編上、などがあるとともに、近世期文学作品(語り物・俳諧・小説他)も少なからず伝承童謡を

取り入れ利用しているものであるから、当然その部分を判定し抽出する作業を通して、伝承童謡所載文献として活用することもできる。

これら江戸期の資料のうち、その採集や蒐集の方法・態度・内容などにおいて、まず注目されるのは、行智『童謡集』及び玉晁『尾張童遊集』とであろう。行智『童謡集』は、江戸浅草を中心とする地域で、「行智がいとけなき時うたひてあそびたるをおもひ出して書き附け」られたもので、量的には約36項目にとどまるが、すでに浅野建二氏も言及しておられるように、子守歌をその機能によって「寝させ唄」「目ざめ唄」「あそばせ唄」と、一応の分類を行なったことがまず一つ掲げられよう。もちろん実際の採集・蒐集の段階で、子守奉公する娘達の歌も多量に伝承しているわけであるから、個々の歌を明確にこのように分類することが難しくなることはたしかであるが、母・姉・子守娘のうたいかける歌が、子供の一日の生活のどの機会に関係しはたらきかけるかということに気付き、この部

類の歌の効用に少しづつ相違のあることを、記録する段階においてなにとか定着させようと努力したことがわかる。また、最後の項目に「鬼わたしのしやう」があるが、そこでは行智の「小さき時から」の鬼決め文句を、変わっていった順に、「一い二ウ三イ四ヨ」↓「鬼袋茶袋」↓「草履さんじよ……」↓「一けん二けんのじやんきち」↓「じやんく（と云ひて虫拳）」↓「ちっく（と云ひて拳）」と掲げて、「此の次はどのやうになるとやらん」と述べ、顧人坊をはやす囃子詞も、「天神様くだせ引」↓「まかしよく」↓「まきやがれく」となったとして、「此の次はどうなるやらん」と結んでいる。つまり行智は、わらべうたやそれにとまなう遊戯が、けつして固定しているものではなく、刻々と変貌し流動するものであるという認識のもとに書き留めていることがよくわかる。「この次はどうなるやらん」には、この編者のわらべうたに対する理解の仕方が込められていると見てよからう。

玉晃の『尾張童遊集』は、当時の尾張における遊戯・伝承童謡を、ほぼ余す所なく採集・蒐集したもののように見うけられ、俳諧関係書・随筆・辞書などを駆使した考証と、詳細にして動きを的確にとらえた多くの挿絵は、この系統中随一のものとして貴重であることは言うまでもない。歌詞にはそれぞれ遊戯の所作、他地方との相違、うたわれる機会などが書き込まれているのも注目すべきことである。例えば、手鞠歌の記述中に次のような箇所がある。

かへる時

かへしてんまりかへておめにかけてそれ沓つ

下をたきくつく時

すくはきやく一奴のはかりにかけてすくはいた

手の甲へのせてハ突

たアけめんぐりひとかへりく二かへり

沓つ突てハ廻り又沓つ突てハ廻る時

いつこうや二こうや

夕方連中わかれに突

お仕舞がらんしよからがんしよ是からしまつてまいりますお

いとまへおさらばへ 又明日来てつきまアンす ひふみ

つき合の前哥

つき合御出くまけたらはちよ勝たら一よまけばら立なはら立

な 是よりヒイフミヨトイふ

手鞠をつくそれぞれの機会や場面、つまり「帰る時」「下を叩き叩き突く時」「手の甲へ乗せては突（く時）」「夕方連中別れに突（く時）」「突き合いの前歌」にうたわれたもので、これらが手鞠突きという遊戯の折り目ごとに挿し挟まれ、その遊びの流れを区切ったり転換させたりする大切な歌（役歌）であったことがわかる。こうした歌を一つにまとめて書き留めた編者の見識は、やはり客観的なもので、当時としてはより科学的だとしてよからう。『熱田手鞠歌』

の「童謡」の項も、それぞれの場と機会を書き込んでいるのでよく理解できるようになっている。

以上、江戸期の文献は、ほぼ個人の手になる個人の編集で、或る一地域における採集・蒐集が多かったが、一部分には、伝承童謡研究の基本的な態度・見解の一端が示されているものと見ることができらる。

(二)

さて、明治期の伝承童謡集として（断片的なものは省略）、次の如きものを数えることができる。

一、『日本歌謡類聚』・下巻（大和田建樹編。明治31年5月。博文館）

二、雑誌『白百合』・4巻1号（明治36年11月）～4巻6号（明治40年4月）、および『日本民謡全集』（前田林外選訂。明治40年3月。本郷書院）、『日本民謡全集』・続篇（同。同年11月。同）

三、『諸国童謡大全』（橋本繁編。明治42年9月春陽堂）、のち『日本民謡大全』と改名（大正15年10月）。

四、『^{あずま}流行時代子供うた』（岡本昆石編。明治27年1月刊。薫

心堂）

五、『日本童謡全集』（大久保葩雪編。明治30年代、又は40年代。筆写本）。

六、『日本全国児童遊戯法』（大田才次郎編。明治34年2月。博文館）

七、雑誌『風俗画報』（明治22年2月創刊。終刊は大正5年3月刊の473号）

八、雑誌『児童研究』（明治31年11月創刊。終刊は昭和18年9月の489号）

以下これらの、内容・特質について述べてみたい。

『日本歌謡類聚』では、「地方唄」に「子供歌」の項を設け、伝承童謡を「子守唄」「遊戯唄」「手鞠唄」「羽子突唄」の四種に分けて（ただし、「盆歌」中の、信濃国埴科郡倉科地方「曲玉遊戯唄」は、この「子供歌」に入れるべきもの）、山城・大和・河内・摂津をはじめ、陸奥から肥前・日向にかけての広い地域の報告をおさめている。「地方唄」のはじめに、「余が数年来こゝろをよせて見るがまに／＼聞か／＼書きとめておきたるもあり。此度あらたに各地方より報し来れるもあり。特に労を取りて親切に恵みおくられし諸君に対しては深くこゝに之を謝す」と書いてあって、ともかく全国的に寄せられた口承の資料をまとめたものであることがわかる。こうした全国的な伝承童謡の蒐集は、前記江戸期のものには

認められないのである。

「遊戲唄」の項には、多様な歌が詰め込まれており、しかもどのような遊戲のどのような機会にうたわれていたものかという注記が行きわたっているとは言えないが、かなりの部分に、例えば「大かん小かんどの子をはしや」に対して「童子等道の東西に分かれて、年重なるが仮りに其の親と成り、対列の子供を替はる替はる呼び出して唄ひ取る。その唄に」の如き説明が見えていて、明治期及びそれ以後の伝承童謡集のスタイルの一つをまずここに見ることができるとしてよい。

『日本歌謡類聚』二冊は、続帝國文庫の第三・四編として出版せられた。つまり軍記・淨瑠璃等の諸作品が当時としては広く集められた、その国文学叢書内にこの二冊が組み込まれ、しかも下巻にこの「子供歌」の項が設けられかなりのページをとっていることは、伝承童謡研究史の上でも一応注意される。

なお、大和田建樹は、言うまでもなく、明治期における唱歌の作者編者として、あるいは美文紀行文の作家として活躍しているが、さらに『日本大文学史』（巻一～巻五。明治32年・博文館）も著わしており、明治三十年代では最も広いと思われるこの文学史の中で、すでに各時代に「歌謡」の章を起している。中古では、神楽・催馬楽・風俗歌、中世では歌謡の進歩として、小唄・哀曲・曲舞、近世の文学では、元録以前として『松の葉』に及び、今代（明治）では

小学唱歌を述べているといった程度ではあるが、歌謡文芸への関心とその研究への意欲は、こうした面にも現われていると思われる。

雑誌『白百合』は、前田林外・岩野泡鳴・相馬御風・岩田古保で結成された東京純文社から、第一巻第一号が明治36年11月に刊行されている。なかでも中心となつた前田林外の意志によると思われるが、第四巻一号から第四巻六号（明治40年4月。終刊）に至る六冊を「民謡号」としており、志田素琴・桜井天壇・姉崎正治・藤井紫影等の民謡に関する評論を掲載するとともに、その多くのページを数百名を越える社友・同好家によって蒐集報告されたという多くの民謡のために費やしている。こうして掲載された多くの資料は、順序を少々入れかえたこと以外はほとんどそのまま、前田林外選訂『日本民謡全集』（明治40年3月）及び『日本民謡全集・続編』（明治40年11月）として刊行された。続編の最後に、広告として「日本民謡全集 続々篇、右目下編輯中、本集講読者諸君並に有志諸君は其地々々の民謡、及び俚謡等をあつめて寄稿せられたし。茲に重ねて懇望す」とあるから、編者前田林外としては、この二冊に続き「続々篇」刊行の予定で、彼の手元にはまだいくらかの資料も残っていたものと思われる。

本書は、民謡全集という名前を題にしたまず最初のものでもあったから、多くの人々の注目を引き、次に引用する如く、当時の各様の雑誌がこれを紹介している。

○事によると茲五十年もたつと、今日の俚謡は全く跡を絶つやうになるかも知れぬ。これ頗る我が文学界のために愁ふべき現象ではあるまいか、俚謡を諸国から集めて、之を長く保存せしめようとするには今の時を過してはならぬ。前田林外氏のこの選著ある、我が文芸界のために大に感謝せねばならぬ。（『帝國文学』・第13巻5号。明治40年5月）

○白百合の社友及び其他の有志が其地方の民謡を報道したるを集めたるもの也。此書が果して民謡の最も佳純なるものを集め得たるか否かは深き研究を要することになるも、兎に角最も必要な事業に着手したるものといふべし。（『中央公論』・第22年6号・通巻219号。明治40年6月）

○林外君が数年来の苦心に依つて、日本全国殆んど至らぬ隈もなし。手鞠歌あり子守唄あり甚句あり流行唄あり、種類また甚だ多し。（『中学世界』・第10巻6号、明治40年5月）

それぞれ引用は一部分であるが、例えばこのように『日本民謡全集』の刊行を喜んでいることがわかる。『日本歌謡類聚』より九年後のことであるが、民謡の集としての反響はそれよりも大きいものがあつた。凡例では、「民謡は諸国民の声、方言の詩なれば、其方言を損せざるやう、かな使ひ等にやゝいかなはしき点ありても成るべく筆記のまゝに輯録する」とある。

さて、この『日本民謡全集』二冊において、伝承童謡の占める割合

は大きく、

手鞠歌 子守歌 子供歌 鬼ごとの歌 羽子板遊び歌 月の歌
亥の子歌 梟の歌 螢の歌 正月歌 鳥追歌 子供憤怒のときの
叫び

の歌詞が寄せられている。例えば、最も量の多い手鞠歌において見るなら、陸奥から薩摩までその多様な報告を認めることができるが、右の項目を見てもわかるように、その分類は不自然で、手鞠歌と梟の歌が、あるいは子守歌と子供憤怒のときの叫びとが対等な部類であると思ふことはできないし、また、「唯憾らくは、編纂の法において未だ完からず、同国の同じ種類の唄が前後所々になり居るが如き、殆ど何等の思慮をも費さざりしにはあらずやと思はるゝ節もなきにあらず」と『萬朝報』の書評にもある如く、その分類や、集としての編纂に不備な点がいくつかある。

『諸国童謡大全』は、後に『日本民謡大全』と改名されたが、橋本繁を中心とする童謡研究会の編集だけあって、本書も伝承童謡が民謡とはば同量程度に掲載されており、伝承童謡研究の資料として欠かせないものになっている。その構成は、「類を分ちて、天気天象、歳時、労作、手鞠唄、子守唄、遊戯歌、雑謡となす」とあるように、伝承童謡としては、「手鞠唄」「子守唄」「歳時（唄）」「天気天象（唄）」「遊戯唄」「雑謡」に分けて掲載していることになる。雑謡には、唱え言・決まり文句・民謡などが含まれ、動物植物

の歌もここに一括されてしまっているが、北原白秋編『日本伝承童謡集成』以下現代に至る伝承童謡集に用いられている。『日本歌謡類聚』や『日本民謡全集』には見えなかった）、標準的分類がまずここに出てくるとしてよいであろう。蒐集国の掲載も、「東京」

「京都」「大阪」を別格とし、畿内・東海道・東山道・北陸道・北海道・山陰道・山陽道・南海道・西海道・琉球・台湾・韓国の順で並べられ、書物としての一つの型をなしている。なお、本書の序文は、泉鏡花によって書かれている。その序文の中に「花涙子其の趣味に憧憬して、経営十数年、日に日にこれ勉めつゝ、こゝに採録するもの、其の数約三萬と註せられる」とあって、どの程度かはわからないが、編者橋本繁との縁があつて序文執筆となつたようである。鏡花作品には、少なからず伝承童謡が利用されているが、本書に掲載された歌との関係に注目せねばならぬ場合もある。

『流行時代子供うた』は、「手毬唄」「羽子突」「手玉唄」「盆々唄」「子守唄」「月夜唄」「種々遊唄」「種々遊言葉」「間違易き語」「狎わん」「尾とり」のような項目をたてている。少なくとも明治27年以前の東都の子供達による伝承の状況を、岡本昆石が集中的に集めた得たものである。志田延義氏も述べておられるように、東都市井伝承童謡として、行智『童謡集』へ溯ることが出来るわけである。もちろん時代性もあって、行智の採集が及んだ地域はより狭く、したがって集め得た量も少ないけれども、その種類にお

いて両者がいに補い合つて、東都における江戸後期から明治期の実体を把握することが出来る。

本書に記載された個々に詳しく及ぶ余裕はないが、例えば、「手鞠唄」の中に「立て突く手毬唄」を三種、別に立ててゐるのなどは、他の三十数種の手鞠唄が座つて突く手鞠に主に用いられたものであることがわかるわけで、前の行智『童謡集』における子守歌や、玉晃『尾張童遊集』の手鞠歌などに見られるような機能や場に注目した科学的な採集の姿勢の一端が、そこに認められるように思う。

大久保葩雪編『日本童謡全集』は、藤田徳太郎氏によってまず紹介され、全体量の五分の一程度が翻刻された。葩雪の自筆本で、「山城国」からはじまり、畿内・東海道・東山道の磐城まで筆写して終っている。各国、手鞠唄、羽子突唄、子守唄、盆唄などがあり、大部分は手鞠唄であるが、『日本歌謡類聚』『日本民謡全集』『諸国童謡大全』などが蒐集していない歌詞や、同歌のものでも部分的に異なるものなどを記し得ている。筆写の時期は明瞭でないが、ほぼ明治30年代後半ではないかと想像する。この本が帝国図書館に入ったのは、大正3年6月16日である。

大久保葩雪については、多くがわからないままになっている。私の知るわずかな事柄はかつて述べたのでここに繰り返さないが、その後、この葩雪の経歴などについて、日本歌謡学会理事会のおり、西沢爽氏に伺つたところ、ご自身及びからたち会に所属する門下生

諸氏を通じて熱心に調べて報告して下さった。その中で注意されることは、三村清三郎氏『本之話』（昭和5年10月刊。岡書院）蔵書家の忌辰の項に、

大久保葩雪 明治四十五年二月一日、名豊號北陸堂、享年四十三、葬谷中三崎觀音寺、法號最照院真龍樂豊居士

とあることである。この記事は、からたち会の井口龍一氏が示されたもので、同氏はさらにその觀音寺に出かけられ、その遺族などについて尋ねられたが、すでにわからなくなってしまうているとのことである。

葩雪の蔵書は、『新群書類聚』・第七・書目類の編集から見ても、主に浮世草子以下、江戸軟文学の諸本であったと推量されるが、そうした中に、彼自身が蒐集清書した『日本童謡全集』・四冊があったのである。明治45年に亡くなってから、その蔵書がどうなったか知りたいたところであるが、この『日本童謡全集』は、大正3年に帝国図書館蔵書となって散佚を免れたわけである。右に述べたように、東山道・磐城以後は書かれていない。『日本童謡全集』としているように、「全集」を目的にしたのであったが、全うされないで終っている。それが葩雪の健康状態によるのかどうか。もしそうだとするなら、『日本童謡全集』の書写は、明治45年に近い頃になるわけであろう。

大田才次郎編『日本全国児童遊戯法』・三冊は、明治34年に博文

館から刊行されている。東京の「鬼定め」から薩摩の「お手鞠」まで、各地各様の遊戯を、挿絵入りで詳細に解説しており、全国的な、しかも民俗学的資料として価値ある蒐集として、この種のものではまず最初であろう。この遊戯の解説中に当然多くの遊戯歌や唱え言が出て来ているわけであって、その数は三百を越える。ゆえに歌詞の羅列ではなく、遊びや風俗と一連の記事になって記録されているわけであるから、伝承の実際がより明瞭になっていることになる。

本書は、付録として、「諸国手鞠歌」「諸国児守歌」「諸国雑謡」を加えている。それは、手鞠歌が、磐城国角田町以下19地域、子守歌が、安房国館山以下19地域、雑謡は動物歌、天体氣象歌、俗謡などがまじって23地域になっている。この付録も合わせて見るなら、本書も全国的に蒐集が行なわれた伝承童謡の文献として注目されるのである。

『尾張童謡集』の部分で注意したが、本書においても、例えば、羽前の部の手鞠のところ、「廻転して突く即ちめぐりつきの数え方」「又一種どんどん突きとて唱句の句意に応じて種種の曲突きをなす」「又二人以上順次に突きては渡すもあり、その時の唱句」などとして、それぞれの場合に用いる歌詞を記している。手鞠突きの実体に即した蒐集記録であり、明治期においてもこのような部類の手鞠歌が各地に伝承していたことがわかる。

さらに雑誌において二種類に及んでおく必要がある。その一つが

『風俗画報』である。明治22年2月、東陽堂から創刊となり、大正5年3月の478号をもって終刊となっている。長く続いた雑誌で、大正期に入るとその掲載項目に変化がおこるが、明治期においては（東京新撰名所図会などの特輯号は別として）、だいたい口絵・論説・人事門・動植物門・飲食門・遊芸門・歌謡門・言語門・地理門・土木門などがたてられており、その歌謡及び遊芸の門に、106号あたりから断続的に、手鞠歌をはじめとする多くの伝承童謡が掲載されるようになる。これは民謡・伝承童謡などに関心をもつ各地の愛読者達からの投稿によるものであるが、その多くが伝承童謡である。今後資料として十分活用できるような、これら伝承童謡の部分を取り出し、『風俗画報』掲載伝承童謡集として一つにまとめておく必要があると思われる。

伝承童謡が掲載されるたびに、編集者側から、その採集報告についての注文が繰り返されている。例えば次のようにある。

○余此稿を草するや、各地の諸君子より続々御送稿あり。是れ諸彦に向ひて大ひに謝せざるを得ず、尚ほ希くは其地の方言等は訂正なく、其儘認められんことを請ふ。坪川生。

○附言 次号より引続き各地の手鞠歌を掲載するにより、尚ほ御送稿の歌へは、精細訛言方言等注解を加へられんことを希ふ。

○坪川附言す。以後御送附の鞠歌には必ず唄の緩急の解し易かる様、ふり仮名を附し、尚ほ方言訛言等は其儘御記しあらんことを

請ふ。

○坪川附言す。爾後御送稿の鞠歌へは、語を延すところへ「――」を附し、歌を縮むところへは「レ」の記号を附せられたし。

明治期における蒐集の一つの方向、つまり研究資料として使用できるよう、なるだけ実体に即したものを掲載しようとする姿勢が見えているとしてよい。

明治31年11月に東京教育研究所から第一巻第一号が発行され（のち発行が日本児童学会となる）、昭和18年9月刊、第41巻12号（通巻489号）まで続いた『児童研究』にも、明治期のものには、伝承童謡がかなり報告されている。そのうちから主なものの項目を引用すると、

- 北海道の子守うた（1の6）
- 泉州地方に於ける児童の遊戯（1の8）
- 岐阜県の俗謡及び子守歌（1の8）
- 越後村松町附近に於ける児童の遊戯（1の10）
- 因幡国鳥取市附近児童の遊戯（2の2）
- 備後地方に於ける童謡（2の4）
- 薩摩東市来村辺に於ける児童の歌謡（3の3）
- 大山近在に於ける子守歌（3の7）
- 長野地方に於て行なはるゝ子守歌並にまり歌
- 手球歌・安芸（3の9）

○陸奥・南半島ノ子守歌（3の10）

○子守歌・伊予（4の2）

○丹後中郡地方俚謡（4の5）

○備後西南地方俚謡（4の6）

○亥子歌（4の9）

○越後越南地方の児童俚謡の研究（5の1）

○子供の楽しみ草（5の7）

○子守歌・丹後（5の7）

○越後の童謡（5の8、5の9）

○児童の俗謡及び其解説（6の7、6の8）

これらが、明治期における雑誌類掲載資料として、『風俗画報』や『白百合』に次ぐものであって、地域的にも他の資料を補うところがある。

(iii)

以上が明治期における主な伝承童謡蒐集の各種であり、風潮であり、その特質である。江戸期の蒐集とはまた異なり、多くの同志同好の報告を得て、全国的に纏めあげられたものが殆んどである。それが、口承文芸蒐集という分野では、一つの近代的様相として把握することもできるのである（葩雪『日本童謡全集』も、編者自身の精力的な採集による資料が考えられるとともに、各地の知人有志か

らの報告によったものも当然に考えられよう）。ここにほぼ全国各地を包む伝承童謡集が一つの定着を見たとしてよい。その歌謡集としての構成・分類に関しては、効果的な、端正にして統一的なものをまだ見るに至っていないが、それでも徐々に研究資料として、有効な蒐集・記録を定着させねばならないという意識・意欲を、右に述べてきた如く、いろいろな点で認め得るのである。

こうした全国的な八種ほどになる伝承童謡の集によって、我が国の主要なその類型のひとわりは、記録され得たかと思われる。江戸期のものも加えて、これらの集によって、少なくとも明治期以前、江戸中期以後の、つまりおそらくは古代から現代に至る延々たる伝承童謡の流れの中で、最も豊富繁栄を見たであろう時期の子供のウタを書き残したことになるのである。

大正期に入って、『俚謡集』（大正3年。文部省）、『俚謡集拾遺』（大正4年。高野斑山・大竹紫葉編）が刊行された。これは諸種歌謡研究上まことに有益な文献であることは言うまでもない。続いて郷土研究社が爐辺叢書を刊行しはじめる。なかに『熊野民謡集』（大正11年12月）、『八重山嶋民謡集』（大正11年12月）、『能美郡民謡集』（大正13年11月）、『吉備郡民謡集』（大正14年3月）、『東石見田原集』（大正15年8月）、『小県郡民謡集』（昭和2年3月）が民謡関係である。しかしこの内、『俚謡集』『東石見田原集』は、伝承童謡を所収しない。ゆえに『俚謡集拾遺』他いくつか

のそうした民謡集に、民謡とともにその一部分として伝承童謡も採集蒐集されたわけであって、しかも明治期のものと対照でき同格で取り扱うことができるような全国的伝承童謡集は、わずかに『俚謡集拾遺』のみということになる（もちろん爐辺叢書の刊行は、各地各郡の集中的調査報告として特色をもつものであり、江戸期の前掲資料を思わせるとともに、現在における口承文芸採集の一つのあるべき姿を予兆しているものである。また民俗学という体系の中に組み込もうとする学問的意識にも支えられての、資料の作成であるから、やはりその刊行は注目すべきである）。

その後の全国的資料となると、北原白秋編『日本伝承童謡集成』（昭和22年6月）ということになるのであるが、これまたその採集地の郡町村が、明治期の資料の如く明示されていないという憾みが残るのである。こうして通覧してみると、明治期特にその後半期が、やはり注目すべき時期であったとしてよいことがわかるのである。

注

- 1 吉田昌志氏「泉鏡花草迷宮覚書―成立の背景について―」（『緑岡詞林』・七号）でもすでに注意されているように、この「花涙子」は橋本繁のことである。
- 2 『民謡音楽』・二巻三号（昭和5年3月）、二巻五号（昭和5年5月）に翻刻された。

- 3 拙稿「伝承童謡研究について」（『日本歌謡研究』・二十二号）、滝沢典子・真鍋昌弘「翻刻 大久保葩雪編・日本童謡全集」（『学苑』・昭和58年9月号）参照
(本学教授)

追記

吾郷寅之進先生と共著の『わらべうた』（桜楓社刊）が出たのは昭和五十一年であった。出版社側の方針もあって、原稿の、そのとき掲載することができなかった分や、それ以後ぼつぼつ、先生も私も手元に溜めてきた覚え書きがあったから、近いうちに『続編わらべうた』を書くことにしてはいかががですかと、私はなんとか先生に申し上げていた。先生もよろこんでくださり、そのお心積りでいて下さったようで、一昨年の秋、お訪ねしてお目もじしたときも（結局、これが、お目にかかり、お話しできた最後であったが）、この事を申し上げて二・三の具体的な打ち合わせもしたように記憶する。

先生が急逝されてしまったいま、もう先生との共著で『続編わらべうた』を出すことはできなくなっていました。わらべうたに関するあれこれの私の覚え書きは、まことに淋しいものとなって残っている。

ここに書いた「明治期における伝承童謡蒐集について」は、その『続編わらべうた』に、序章の一部分として入れようと思って用意していたものである。身近にご指導をたまわり、学恩を蒙った者として、先生を思い出しながら、少々手を加え、追悼の意をこめてここに載せさせていただくことにした。